

オンラインでの「密」な会議が、つながりを生む 中国ブロック「青プロ」5県からの参加で成功

自治労連中国ブロック協議会

6月26日、中国ブロック「青プロ」を オンラインで開催

6月26日、中国ブロック「青プロ」企画を、広島・岡山・山口の各県会場と参加者の自宅などをオンラインでつなぎ開催。5県から69人が参加しました。

岡山・高梁市職労の岡崎加奈子さんが民主的自治体労働者論について講演。住民のためにいい仕事がしたいという青年の思いを大切に、この機会に自分の仕事について語ろうと呼びかけました。

中国ブロック「青プロ」のテーマは「福祉」。実行委員が広島県福山市鞆の浦での取材を重ねて作成した動画「福祉施設での地域共生社会の実践」を視聴。施設の方からは民主的自治体労働者論の実践ともいえるお話もあり、参加者は真剣に聞き入っていました。



<福祉施設の方へのインタビュー動画>

オンラインを活用した鞆の浦にまつわるクイズ企画で盛り上がった後、グループに分かれて意見交換。講演や動画の感想を交えつつ、

「住民のため、自分のため、いい仕事ってなんだろう」について思いを出し合いました。

フィナーレとして、参加者全員でSMAPの「世界に一つだけの花」を手話で歌いました。最後の「♪オンリーワン」では、人差し指をみんなで掲げ、中国ブロックの青年が一つにまとまった瞬間となりました。



最初は「平和」をテーマに準備するも、 コロナにより無念の延期

中国ブロックで「青プロ」の取り組みが始まったのは2018年12月。ブロック労働学校の分科会「青年しゃべり場」で活発な交流が行われるとともに、「青プロ」への積極的な参加が呼びかけられました。

2019年2月に実行委員会が発足。6月の第2回実行委員会で、広島県呉市で「平和」をテーマに開催することを確認。以後、平和学習・現地下見・民主的自治体労働者論の学習・内容の組み立てなど、開催に向けた準備を加速させていきました。

しかし、新型コロナウイルス感染拡大により、企画

自体が無念の延期に。実行委員会は、2020年秋以降、事実上の休止状態となりました。

2週に一度の実行委員会が青年のつながりを深め毎回活発な議論に

2021年に入り、自治労連本部から新たに「2022年開催」との提起を受け、6月に実行委員会の再開に向けた代表者会議をオンラインで開催。青年から、準備が整いつつあった中で延期となったことへの悔しさや「5県でまた盛り上がっていききたい」などの思いが語られ、実行委員会の再開を確認しました。

再開後は、企画の練り直しから議論が始まりました。テーマや開催地に加え、コロナ禍を踏まえた開催形態の検討も迫られました。再開後に新たに加わってくれた青年の学習も課題となりました。

本番まであと1年の時点で課題が山積していたこともあり、2週に一度、夜にオンラインでの開催となった実行委員会。初めこそぎこちない雰囲気もありましたが、頻りに顔を合わせることで、実行委員同士のつながりが深まり、企画を成功させるための積極的な議論へとつながっていきました。



<2022年4月にはリアル・オンライン併用の実行委員会も開催>

実行委員会は2週に一度の開催ペースを維持し、最終的には31回の開催となりました。移動時間にとられないというオンラインの

利点により、少人数になることは、ほぼありませんでした。議論に行き詰まったり、コロナ感染拡大の影響で計画変更を余儀なくされたりするなど困難もありましたが、援助に入った「青年の先輩」（「おきプロ」世代）から助言を得つつ、さまざまな知恵を出し合い、企画を練り上げていきました。

プレから本番へとつながる企画に苦勞と努力が実り大きく成功

こうした議論の中で、2022年の「青プロ」について、「福祉」をテーマに、福山市鞆の浦で、オンライン主体での開催を決定しました（その後、コロナの感染状況を考慮し現地入りは断念）。鞆の浦では、民間の福祉施設が中心となって、「その地域で暮らし続けたい」と願う利用者に寄り添い、地域全体で先進的な取り組みが行われており、そこから学んで行こうということになりました。

また、福祉について考える機会を設け、本番への興味につなげるため、1ヶ月前にプレ企画を行うことも決定。施設の方との打ち合わせ・現地取材・各県での参加呼びかけなど、実行委員自身も日々の仕事を抱えながら、手分けをして準備を進めていきました。



5月29日、プレ企画をオンラインで開催。5県すべてから52人が参加しました。アイズブレイク企画として実行委員手作りの「老後すごろく」で交流を深めた後、「住みやすい

街ってなんだろう？」をテーマに話し合い。最後は本番企画の宣伝も行いました。どんな感じになるか不安もありましたが、当日は時間が足りなくなるほど大いに盛り上がりました。実行委員の狙い通りの展開となりました。

プレ終了から本番まで1ヶ月弱は、プレの振り返り・企画の確定・参加集約を同時並行で進めるという苦しい時期でしたが、これまでの積み重ねでつながりの深まった実行委員は、結束して準備を進め、プレ企画を上回る参加を得て、大きく成功させました。

参加者からは「自分の仕事を見つめなおし市民の方の目線でどうしたらいいかをあらためて考えることができた」(市役所・行政職)、「普段話すことのない他業種の方と色々な意見を交換することができて現状を知ることができた」(特養・介護職)、「新たな発見や自分の普段の働き方、働く意味をとっても考えられるとても良い機会になった」(障がい者施設・看護職)などの感想が寄せられました。



<広島会場に集まった青年たち>

10月には「青プロアフター」を計画 絆を活かして次のステップに

7月14日、まとめの実行委員会を開催。実行委員からは「一人一人のいいところが十分に出た」、「すごくいい形で終わることができた。後輩たちにもやってほしい」、「組合に入

って初めて携わった大きなイベント。単組で何かやるための経験になった」、「オンラインならではの楽しさもあった」、「2週に一度の会議が団結力につながった」、「青プロでつながった絆を活かしていきたい」などの感想が出されました。今年10月開催の中国ブロック定期総会・労働学校(山口市)では、2日目の分科会で「青プロ」のアフター企画を計画しており、「その日にぜひ集まろう」と呼びかけました。

中国ブロックでは、鳥取・島根に県単位の青年部がなく、広島の青年部は休止中。岡山・山口の青年部も、コロナ禍で活動ができていませんでした。今回の「青プロ」の取り組みを通じて、青年が集まるきっかけをつくることができたといえます。

しかし、これで終わりではなく、今後どのようにしていくかが課題です。「青プロ」参加者からも「目先の業務に追われる中で、立ち止まって考え直すきっかけの場を提供してほしい」(放課後支援員)、「“職場環境を改善するために”のようなテーマでグループトークできる内容があれば」(行政職)といった声が出されています。

コロナ感染拡大が高止まりの中で、リアルで集まることはまだ難しい状況ですが、オンラインの活用を含め、ブロック・各県組織・各単組で取り組みを進めていくことが求められます。